

選択場面における勇気に影響を与える要因の検討

A Study of Factors Affecting Courage in Situations of Choice

藤山 静玖

問題と目的

近年、学卒無業者の増加や、フリーター、ニートの問題が注目を浴びている。青年心理学では、青年期を社会との関係で自己を位置づけていく時期ととらえており、Erikson(1959)は、青年期の若者は社会的役割を獲得することによって「アイデンティティ確立」に至ると述べた。この意味では、「学卒無業者」や「フリーター」、「ニート」状態の青年はアイデンティティ確立に困難をきたしている、「アイデンティティ拡散」の状態にあるといえるだろう。

Erikson(1959)は、青年が成人期に入ることを一定期間猶予し、その間にアイデンティティ確立に向けて模索が必要となっている事実を指摘した。青年期である大学生は、職業決定や生き方の選択などを模索できる猶予が与えられており、モラトリアム期にいるといえる。下山(1992)は、大学生のモラトリアム期の過ごし方をより細分化して把握するために「モラトリアム尺度」を作成し、「模索」「拡散」「回避」「延期」の4因子を得た。下山(1992)は、この4つのモラトリアム状態のうち、「模索」がアイデンティティ確立度の高さに関連性があることを見出した。その理由として、「模索」状態の大学生は、モラトリアム状態にはあるものの、主体的に自分の生き方の決定に取り組んでいる状態であるためだと指摘している。一方、「回避」は、同じモラトリアム状態であってもアイデンティティの確立に有意な負の関連を示し、

アイデンティティ未確立と関連性があることを指摘している。「回避」は、大人になりたくないと感じており、無気力なモラトリアム期を過ごしている状態を指している。以上のことから、自分の生き方を主体的に選択することは、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立という面からみて重要だといえよう。

アイデンティティの未確立は、青年期から成人期へ移る「勇気」が育っていない状態であると言えるのではないだろうか。小此木(1978)は、「大人になれない青年は、主体的な選択を先送りにしてしまい、いつまでもモラトリアムから脱することが出来ない」と指摘している。このことは、アイデンティティ未確立が、青年が人生における主体的な選択を回避し、先延ばしすることと同義だということを示している。また、大野(2010)が「青年期においてアイデンティティの獲得が発達主題とされているということは、青年が将来の自分の人生を選び、キャリアのスタートラインに立つ覚悟を決めることの重要性を意味している」と述べているように、アイデンティティ未確立の問題は、キャリアをスタートする覚悟を持って、成人の世界に移る勇気が育っていないことが原因だと考えられるであろう。

しかし、成人期へ踏み出す勇気を持つことは容易ではない。青年期から成人期へと移行する途中にある大学生は、「モラトリアム」という社会的猶予を与えられながら、一方では社会的な存在としての自覚を持つことを促され、社会

が認める生き方と、自己が望む生き方で折り合いをつける必要が生じる。そういった中、自己の生き方を1つだけに選択することは困難を伴う。人生における選択場面は無数にあり、正しい選択など誰にもわからない。その中で、自分の中の迷いを断ち切り、社会に立ち向かうための「勇気」が必要になる。そのためには、青年期から成人期へ移行する勇気を規定する要因を検討する必要がある。モラトリアム状態から抜け出し、成人の世界へ移行する「勇気」を持つことで、将来の生き方の選択における支援の手がかりを得ることが出来ると考えられるからである。

しかし、先行研究を概観すると勇気に関する研究は少なく、筆者の知る限り、どういった要因が勇気に影響を与えているのかについて研究した論文は見受けられない。したがって、本研究では、どのような要因が勇気を規定する要因となるのかについて検討する。

勇気の定義づけ

本研究で「勇気」は“困難や悪い結果が予想されていたとしても、ある行動を起こすに十分な動機付け”と定義する(堀合, 2011)。「勇気」と一口に言っても、「ご老人に席を譲る」といった日常の出来事で必要とするちょっとした勇気から、キャリア選択といった人生に関わる大きな勇気まで様々である。これらすべてに共通するのは、勇気を発揮する本人が、自分の意思で実行することを選択するということである。しかし、“勇気”という広い概念を取り扱うにあたり、青年が成人期へ移行するための勇気とは別の勇気も含まれてしまう場合も考えられる。本研究では、研究の焦点を絞るため、“青年期から成人期へ移行する上での選択場面における勇気”に限定し、他の日常場面における勇気などは取り扱わないこととする。

選択場面における勇気に影響を与える要因

選択場面における勇気に影響する要因として考えられるのが、「勇気の周辺概念」「認知的方略」「完璧主義」である。

「勇気の周辺概念」には、“役割実験に必要な勇気”“誠実”“冒険心”“評価懸念”の4つの下位尺度がある(堀合, 2011)。“役割実験に必要な勇気”は、青年が実験的にさまざまな事柄に挑戦してみることを意味する。“誠実”は、青年が自ら選び取ったものに対して夢中になって取り組むことを指す。“冒険心”は、危険な場面や状況に対し動じない、度胸があるといった意味合いにおいて発揮される勇気を意味する。“評価懸念”は、周りの評価が気になるあまり、自分の選択に自信が持てず、選択への意志が揺らいでしまうかどうかを意味する。これら4つは、勇気を出す場面に影響を及ぼすと考えられる。例えば、他人の評価を気にしすぎる人は、選択場面においても、他人の目や評価がスTOPパーとなってしまい、勇気を出すことを躊躇ってしまうと考えられる。また、危険な場面や状況に動じない度胸を持つものは、選択場面においても、これから起こるかもしれないデメリットを気にせず、その先が不透明な選択場面でも勇気をもって飛び込んでいけるかもしれない。

認知的方略(cognitive strategy)とは、問題状況に直面した際に、人が目標や行動に向かうための認知・行動・予期・努力の一貫したパターンと定義される(Norem, 1989)。認知的方略は“失敗に対する予期・熟考”“過去のパフォーマンスの認知”“成功に対する熟考”“計画に対する熟考”の4つの下位尺度からなる(外山, 2015)。“失敗に対する予期・熟考”は、これから遭遇する重要な場面において、失敗するという状況を予測したり、熟考したりすることである。“過去のパフォーマンスの認知”は、過去の自分のパフォーマンスについてどのように認知しているかという項目である。“成功

に対する熟考”は、成功についてあれこれ考え込んで熟考することである。“計画に対する熟考”は、これから迎える遂行場面において、どうすれば良いのかその対処について広く熟考することである。目標に対する努力や計画の仕方と、選択場面における勇気とは関連があると考えられるため、本研究では目標に対する捉え方を測る尺度として、認知的方略を取り上げた。

完全主義は、自己に過度な完全性を求めることを指す。桜井・大谷(1997)は、完全主義の基準を自己に求める“自己志向的完全主義”に焦点を絞った新完全主義尺度を作成し、完全主義を4つの側面から捉えた。1つは“完全でありたいという欲求 (Desire for perfection: 以下 DP)”であり、「どんなことでも完璧にやり遂げたい」など、完璧でいたいという欲求を指す。この欲求は完全主義の基本的な特徴である。2つ目は“自分に高い目標を課する傾向 (Personal Standard: 以下 PS)”であり、自分に高い目標を課し、その目標を完全に達成しようと努力する側面である。3つ目は“ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (Concern over Mistakes: 以下 CM)”であり、少しの失敗でも、「完璧にできなければ自分はダメな人間だ」と気にする傾向である。最後は“自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向 (Doubting of Actions: 以下 D)”であり、課題の出来栄に対して、常に漠然とした不安を持つ傾向を指す。このうち、CMと失敗恐怖は正の相関にあることが知られている(桜井・大谷, 1997)。また、藤田(2008)は、完全主義のうちCMとDが課題先延ばし行動と正の相関があることを見出している。そのため、CMの高い者は、選択場面においても成功を選ぶよりも失敗することを恐れてしまい、決めなければいけないことを先延ばししてしまい、勇気を出して何かを選択することをためらってしまうと考えられる。

以上のことから、本研究では、大学生を対象とし、勇気の周辺概念、認知的方略、完全主義

の観点から、選択場面における勇気を規定する要因について検討する。

方法

(1) 調査協力者

大学生 1~4 年生 132 名 (男性 53 名、女性 79 名) を対象に質問紙調査を行った。回答に不備がある者が見られなかったため、全員を分析対象とした。平均年齢 21.1 歳 ($SD=1.54$) であった。

(2) 調査時期

2018 年 11 月に実施した。

(3) 調査内容

質問紙法を用いた。以下の 5 つの内容で構成されている。

① 調査協力者に関する項目

調査協力者の性別、年齢、学年、大学名、専攻を調査した。

② 選択場面における勇気に関する調査

本研究では、堀合(2011)の選択場面における勇気尺度を用いた。この尺度は、「決断力」「意思の持続性」「困難に対する覚悟」の3つの下位尺度から構成されている。「いざ決断を迫られると、戸惑ってしまう」「たとえ困難な道に進むことを選択したとしても、がんばり続けることができる」「自分が本当にやりたいと思うことならば、困難なことでも諦めない」などについて、5件法(1:あてはまらない、2:あまりあてはまらない、3:どちらでもない、4:ややあてはまる、5:あてはまる)で回答を求めた。

③ 勇気の周辺概念に関する調査

青年期の選択場面における勇気尺度(堀合、

2011)のうち、勇気の周辺概念である“役割実験に必要な勇気”、“誠実”、“冒険心”、“評価懸念”の4つの下位尺度を使用した。しかし、“役割実験に必要な勇気”に関して、因子名が的確に項目を表すものだと思われないため、“チャレンジ”に改変した。“役割実験に必要な勇気”は、「社会経験になるので色んなことに挑戦したい」のように、自分をよりステップアップするために新しいことに挑戦するといった内容の項目であったため、“チャレンジ”と改変した。

勇気の周辺概念の各下位尺度の α 係数は、“チャレンジ”で0.75、“誠実”で0.68、“冒険心”で0.74、“評価懸念”で0.79であった。

“チャレンジ”では「自分の可能性を広げるために、いろいろなことに挑戦したい」、「誠実”では「何かに夢中になって取り組むことが出来る」、「冒険心”では「人が怖がってしないようなことをするのが好きだ」、「評価懸念”では、「自分のした選択で、周りがどのように自分を評価するのが気になってしまう」などについて、5件法（1：あてはまらない、2：あまりあてはまらない、3：どちらでもない、4：ややあてはまる、5：あてはまる）で回答を求めた。

④ 認知的方略に関する調査

認知的方略尺度(外山, 2015)を用いた。「失敗に対する予期・熟考」「過去のパフォーマンスの認知」「成功に対する熟考」「計画に対する熟考」の4因子20項目から成る。外山(2015)にならい、“ベストを尽くしたい状況(例えば、試験、試合、発表など)が未来にある状況を想像してください”と教示を行った。認知的方略の各下位尺度の α 係数は、“失敗に対する予期・熟考”で0.83、“過去のパフォーマンスの認知”で0.88、“成功に対する熟考”で0.87、“計画に対する熟考”で0.92であった。“失敗に対する予期”は「その状況で私は失敗するだろうと考える」、「過去のパフォーマンスの認知」は「過去の同じような状況では、たいいてい優れた結果

を収めてきた」、「成功に対する熟考」は「その状況で私は成功するだろうと考える」、「計画に対する熟考」は「その状況にのぞむ前に、十分時間をかけて対応策を練る」などについて、7件法（1：全くあてはまらない、2：あまりあてはまらない、3：どちらかというにあてはまらない、4：どちらともいえない、5：どちらかというにあてはまる、6：ややあてはまる、7：とてもあてはまる）で回答を求めた。

⑤ 完全主義に関する調査

新完全主義尺度(桜井・大谷, 1997)を用いた。「完全でありたいという欲求」「自分に高い目標を課する傾向」「ミス(失敗)を過度に気にする傾向」「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」の4因子20項目から成る。新完全主義の各下位尺度の α 係数は、“完全でありたいという欲求”で0.81、“自分に高い目標を課する傾向”で0.66、“ミス(失敗)を過度に気にする傾向”で0.76、“自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向”で0.67であった。“完全でありたいという欲求”は「やるべきことは完璧にやらなければならない」、「自分に高い目標を課する傾向」は「何事においても最高の水準を目指している」、「ミス(失敗)を過度に気にする傾向」は「“失敗は成功のもと”などとは考えられない」、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」は「何かをやり残しているようで不安になることがある」などについて6件法（1：全くあてはまらない、2：あてはまらない、3：あまりあてはまらない、4：ややあてはまる、5：あてはまる、6：とてもあてはまる）で回答を求めた。

(4) 調査依頼の手続き

調査は、知人を通してURLを配布し、オンライン上で回答を求めた。アンケートフォームとしてGoogleフォームを利用した。

(5) 倫理的配慮

質問紙のフェイスシートに、この質問紙の使用目的や個人情報の取り扱いについて「みなさまの回答は、統計的に処理されます。したがって、この回答が個人を特定する目的で使用されることはありません。また、みなさまのプライバシーには細心の注意を払い、個人の情報が外部に漏れることのないよう配慮いたします。」という説明文を記載した。また、「みなさまは、この調査への協力を拒否することもできます。内容には注意していますが、もしも気分が悪くなったり、もうやめたいと思ったりされた方は、その場で回答をやめて下さってかまいません。」という、いつでも回答を中断することもできる旨も記載した。なお、無記名で回答を求めた。

結果

(1) 選択場面における勇気を測定する項目の因子構造の確認

選択場面における勇気尺度 12 項目に関して、逆転項目の処理を行った後、因子間における相関を考慮した上で、確認的因子分析(主因子法・promax 回転)を行った。その結果、固有値 1 以上で 12 因子が抽出された。固有値の減衰状況 (4.82、1.58、1.01、0.85、0.75…) から、1 因子が適当だと判断された。そこで再度 1 因子を仮定して、主因子法・promax 回転による因子分析を行った。その結果、1 項目の因子負荷量が 0.35 を下回っており、十分な因子負荷量を示さないと判断し、分析から除外した。なお、回転前の 1 因子で 11 項目の全分散を説明する割合は 35.07%であった。また、Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .86$ であった。

(2) 各変数の記述統計量

選択場面における勇気、勇気の周辺概念尺度(役割実験に必要な勇気、誠実、冒険心、評価懸念)、認知的方略尺度(失敗に対する予期・

熟考、過去のパフォーマンスの認知、成功に対する熟考、計画に対する熟考)、新完全主義尺度(完全でありたいという欲求、自分に高い目標を課する傾向、ミス(失敗)を過度に気にする傾向、自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向)の各下位尺度の 13 の変数の記述統計量を求めた。結果を Table1 に示す。

(3) 性差の検討

各尺度の得点に性差があるかどうかを検討するために、性別を独立変数、勇気の周辺概念尺度(役割実験に必要な勇気、誠実、冒険心、評価懸念)、認知的方略尺度(失敗に対する予期・熟考、過去のパフォーマンスの認知、成功に対する熟考、計画に対する熟考)、新完全主義尺度(完全でありたいという欲求、自分に高い目標を課する傾向、ミス(失敗)を過度に気にする傾向、自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向)を従属変数として、対応の無い t 検定を行った。結果を Table1 に示す。その結果、すべての尺度得点において男女の間に有意差は見られなかった。そのため、以降の分析では性別の要因を考慮しないこととした。

(4) 選択場面における勇気を規定する要因の検討

選択場面における勇気を規定する要因を検討するために、「勇気の周辺概念」「認知的方略」および、「完全主義」を独立変数、「選択場面における勇気」を従属変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、「チャレンジ」が正の有意な影響を示し ($\beta = .31$, $p < .001$)、「評価懸念」が負の有意な影響を示した ($\beta = -.26$, $p < .001$)。また、「熟中」と「計画に対する熟考」が正の有意な影響を示し、(順に $\beta = .22$, $p < .01$, $\beta = .19$, $p < .01$)「失敗に対する予期・熟考」が負の有意な影響を示した。 ($\beta = -.19$, $p < .01$)。また、「自分に高い目標を課する傾向」が正の有意な影響を示し

Table1. 各尺度の全体・性別の記述統計量及び性差(N=134)

尺度名	Range	全体		男性		女性		t値	p値
		平均	SD	平均	SD	平均	SD		
選択場面における勇気	1-5	3.38	0.67	3.58	0.56	3.26	0.65	0.01	n.s.
(勇気の周辺概念)									
チャレンジ	1-5	3.99	0.78	4.01	0.78	3.99	0.75	0.89	n.s.
熱中		4.04	0.70	4.09	0.70	4.03	0.67	0.62	n.s.
冒険心		2.59	0.99	2.71	0.84	2.50	1.03	0.22	n.s.
評価懸念		3.34	0.10	3.17	1.12	3.46	0.86	0.10	n.s.
(認知的方略)	1-7								
失敗に対する予期・熱考		3.89	1.42	3.91	1.50	3.91	1.37	0.98	n.s.
過去のパフォーマンスの認知		4.27	1.27	4.14	1.23	4.35	1.31	0.37	n.s.
成功に対する熱考		4.38	1.41	4.45	1.52	4.30	1.35	0.55	n.s.
計画に対する熱考		4.90	1.49	5.00	1.30	4.82	1.61	0.51	n.s.
(新完全主義)	1-6								
完全でありたいという欲求		3.86	1.11	3.70	1.11	3.99	1.10	0.15	n.s.
自分に高い目標を課する傾向		3.86	0.93	3.92	0.92	3.83	0.93	0.58	n.s.
ミス(失敗)を過度に気にする傾向		2.86	1.13	2.72	1.06	2.94	1.15	0.27	n.s.
自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向		4.34	0.95	4.33	0.96	4.38	0.91	0.79	n.s.

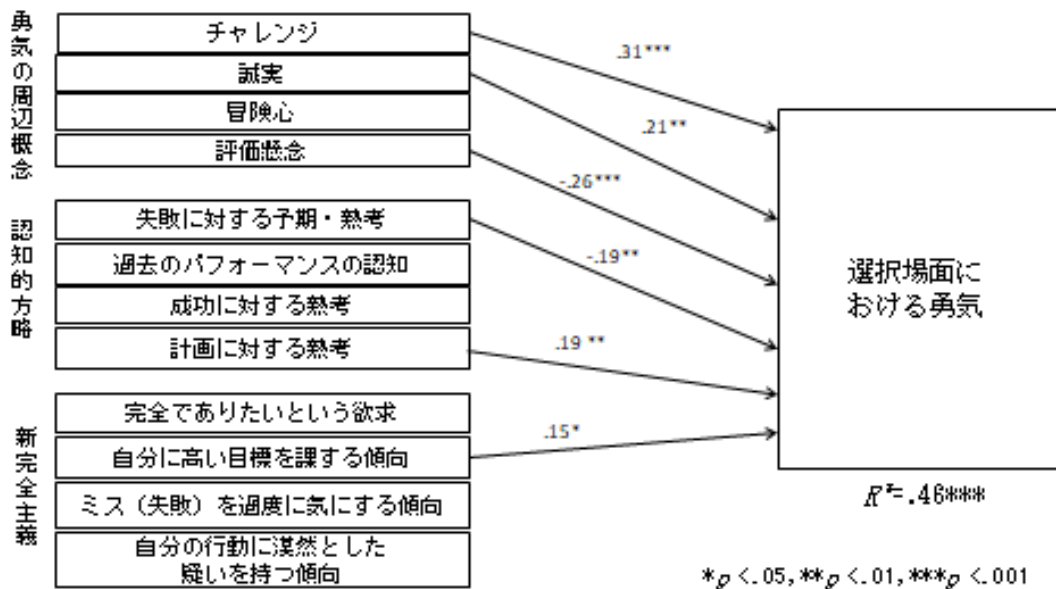


Figure1. 勇気の周辺概念、認知的方略、新完全主義が選択場面における勇気に与える影響

た ($\beta = .15$, $p < .05$)。しかし、それ以外の要因とは関連が見られなかった。結果を Figure1 に示す。なお、多重共線性を確認するために各変数の VIF 値を求めた VIF 値は 1.08~1.26 の範囲であり多重共線性の問題は生じないことが確認された。

考察

本研究では、大学生を対象として、勇気の周辺概念、認知的方略、完全主義の観点から、選

択場面における勇気を規定する要因の検討を行った。

(1) 選択場面における勇気を規定する要因の検討

勇気の周辺概念、認知的方略、完全主義が、選択場面における勇気にどのような影響を与えているかについて検討した。その結果、勇気の周辺概念において、「チャレンジ」が選択場面における勇気に正の影響を与え、「評価懸念」が負の影響を与えることが見いだされた。また、

「誠実」が正の影響を与えることが明らかになった。認知的方略に関しては、「計画に対する熟考」が正の影響を示し、「失敗に対する予期・熟考」が負の影響を与えることが示された。完全主義に関しては、「自分に高い目標を課する傾向」のみ正の影響を示した。

まず、勇気の周辺概念が選択場面における勇気に及ぼす影響について考察する。“チャレンジ”は、選択場面における勇気に正の影響を及ぼしていた。チャレンジは、「自分の可能性を広げるために、いろんなことに挑戦したい」など、大学生が実験的にさまざまな事柄に挑戦するといった項目の内容から成る。したがって、大学生がアルバイトなどで“働く”ことを経験したり、インターンシップに行き大人の世界を体験したりすることで、「やれば出来る」という感覚を養い、それが選択場面における勇気にも影響していると考えられる。また、中西・玉瀬(2014)は、高ストレス下で健康を保つ人々が持つ性格特性のうちの1つである「チャレンジ」と、「肯定的な未来志向」との間に正の相関を見出している。このことから、新たな出来事にどんどんチャレンジすることは、明るくポジティブな未来を予想し、選択場面でも主体的に選択する勇気を持てるということだと言える。

“評価懸念”は、「自分のした選択で、他者が何と言うか気になってしまう」といった、他者からの評価により自分の信じた選択が揺るがされてしまう程度を問う項目である。“評価懸念”と選択場面における勇気の間に負の影響が認められたことは、自分に自信が持てず他者を参照ばかりして生きている人は、「他の人がどう思うか」を気にするあまり、主体的な選択が出来ず、選択場面でなかなか一步を踏み出せない可能性が示唆された。実際、安東(2006)は、評価懸念と主導性の間に負の相関を認めている。主導性とは、自分が主となって物事を動かすことのできる力の事であり、他者からどう思

われるかを気にしない人は、自分のやりたいことを進んで実行できるということを述べている。逆を言えば、他人の評価を気にする人は、自分のやりたいことにむかって努力できないということであり、選択場面においてもひるんでしまう可能性が考えられる。

“誠実”は、選択場面における勇気に正の影響を示した。これは、何かに夢中になり、好きなことに真剣に取り組むということで、選択場面においても決断する勇気を持てるということを示唆する。実際、熊野(2013)は、「熱中できるものがある」「時間を忘れて夢中になっていることよくある」など、ポジティブな状況に夢中になることと、未来の目標意識との間に高い相関を持つことを見出している。何かに夢中になることは、その分野において未来に目標を持つことにつながり、間接的に選択場面における勇気を持つことにつながっているのかもしれない。

認知的方略に関しては、「計画に対する熟考」が正の影響を示し、「失敗に対する予期・熟考」が負の影響を与えることが示された。「計画に対する熟考」は、これから迎える遂行場面において、どうすれば良いか、その対処について広く熟考することを指す。認知的方略は、質問紙で「ベストを尽くしたい状況(例えば試験、試合、発表など)が未来にある状況を想像してください」と教示している。このような状況では、「その状況にのぞむ前に、十分時間をかけて対応策を練る」など、選択場面に挑む前にプランニングを十分に行うことで、選択を迫られる場面でも躊躇することなく選択できるようになると考えられる。

「失敗に対する熟考」は、失敗についてあれこれ考え込んで広く熟考することを示す項目であり、これから起こる状況に対し、「何か良くないことが起こるかもしれない」、「失敗したらどうしようかとくよくよ考える」などの項目から成る。実際、失敗に対してネガティブな感

情を喚起させるものと考える価値観が高いほど成功を希求する達成動機は低く、失敗を過度に気にすることで新たな課題に挑戦したり、成功を求める希求が弱い可能性を示唆する研究もある(池田, 2012)。このことから、失敗に対してネガティブな感情を持つことは、人生における選択場面で躊躇してしまうことが示唆された。

完全主義に関しては、「自分に高い目標を課する傾向」のみ正の影響を示した。「自分に高い目標を課する傾向」は、「簡単な課題ばかり選んでいては、だめな人間になる」などの項目からなる。自分に高い目標を課す人は、重要な選択場面であっても「自分はまだ難しい課題にチャレンジしなくてはいけない」という囚われに似た気持ちを抱いているといえるだろう。したがって、何か選択を迫られるような場面では失敗する恐怖よりも、より自分に高い水準を課し、自己を高められる方を選択するのかもしれない。また、「何事においても最高の水準を目指している」といった項目もあり、自分に高い目標を課す傾向のある人は、自分に対して“こうありたい”という希望が強く、選択場面においても恐れずに勇気を出すことにつながっているのかもしれないことが示唆された。

(2) まとめ

本研究では、大学生を対象に、勇気の周辺概念、認知的方略、完全主義の観点から、選択場面における勇気を規定する要因の検討を行った。

その結果、勇気の周辺概念に関しては、「チャレンジ」が選択場面における勇気に正の影響を、「評価懸念」が負の影響を与えることが見いだされた。また、「熱中」がやや弱い正の影響を与えることが明らかになった。認知的方略に関しては、「計画に対する熟考」がやや弱い正の影響を示し、「失敗に対する予期・熟考」がやや弱い負の影響を与えることが示された。完全主義に関しては、「自分に高い目標を課す

傾向」のみ有意傾向のやや弱い正の傾向を示した。

(3) 今後の課題

Erikson(1959)が、社会的役割の獲得において最も中心を占めるのが職業決定であると述べているように、大学生において、アイデンティティの確立に大きな影響を与えるような選択場面は「職業選択」であろう。ここでは、社会へ向けて新たな一歩を踏み出す大学生に対しての支援を考える。

多くの高校で進路(職業)指導は「受験指導」という形で行われている。そのため、大学に入学した学生は、大学入学という大きな目的を果たしてしまい、アパシー状態になってしまうことも少なくない(下山, 1996)。本研究において、「誠実」が選択場面における勇気にやや弱い正の影響を示したことから、大学生のうちに何か勉強以外でも夢中になれるものを見つけることが選択場面における勇気に影響を及ぼすといえるだろう。“チャレンジ”が選択場面における勇気に正の影響を及ぼしているという結果も含め、大学生のうちに自分の興味のあることについて積極的にチャレンジし、夢中になれることを見つけることの重要性を示している。

大学側にも、大学生が過ごす4年間を自己を積極的に模索するモラトリアム期として十分に機能させることが求められる。実際、どのような企業に就職したとしても、その就職の失敗・成功はその会社に入ってみないとわからない面がある。だからこそ、学生は自分の行う職業選択に自信が持てず、他者からの評価に左右されてしまうこともあるだろう。“評価懸念”が選択場面における勇気に負の影響を及ぼしたことから、学生自身が他人の評価を気にせず、自分のキャリア形成について「これでいい」と思えるような取り組みが必要である。例えば、キャリアについて悩みを抱えていた卒業生と在大学生との交流や悩み相談が出来るような取り組みが考えられる。全ての学生に向けて発信

されるスタンダードな情報はどこでも入手できるが、卒業生という貴重な人材を活かした一時的情報は学生個人だけでは、なかなか手に入る機会がない。先輩が実際に勇気を出して職業決定をした話を聞くことで、学生自身も「こういう生き方をしてもいいのかもしれない」と感じると、他人の評価を気にしなくなる可能性がある。

また、「計画に対する熟考」が選択場面における勇気にやや弱い正の影響を示したことから、大学生のキャリア教育では、企業の情報収集の仕方や、社会に出たときのマナーなどの授業を多く行い、大学生のキャリア選択における準備や対策を出来るだけ行うことで、社会へ踏み出す勇気を持つことにつながる可能性が示唆された。大学生にとって、就職活動は通常1度きりの活動であることを考えると、就職活動の方法や、社会でのマナーを早いうちにしておくことは、その後の就職への勇気に大きな影響を及ぼすと考えられる。“キャリア選択への準備や対策”といった場合、その内容は職業や進路の選択における準備を示すことが多いが、より広義に捉えなおすことも出来よう。例えば吉田(1987)は、進路選択には、自分の能力、興味、適性や職業選択についての自己の目的・目標をどの程度明確化しているかといった「決定者個人に関わる内的な情報」も必要だと述べている。したがって、就職先の情報は勿論、自己についての情報をより明確にする機会を多く設けることによって、企業に対する選好や評価も変化し、より自分の将来のキャリアについて計画を立てやすくなるかもしれない。また、仮に自己を知る機会があっても、それをキャリア形成に活かさなければ意味が無い。自己分析は、単に行うだけで終わらせず、知った自己の特性をどのように今後のキャリアに活かしていくかまで考える必要がある。例えば、行った自己分析と自己の価値観や理想と照らし合わせる作業を行い、これからどんなキャリアを

実現したいのかを考えることも、将来の目標を明確化する上で重要である。また、自己分析で知り得た自分の強みや傾向を、具体的なエピソードを交えて話す練習をすることで、就職活動の際の自己PRに役立てることもできるかもしれない。このように、自己分析はただ行うだけで終わらせるのではなく、その後の自己実現に繋げるための取り組みが必要であろう。

今後の課題として、今現在大学生である者のみを対象に研究を行っており、職についていない者や、大学を中退した者については、選択場面における勇気について検討できなかったことが挙げられる。したがって、大学生のモラトリアム状態を脱するためのキャリア教育については考えられるものの、職に就きたい気持ちはあるけれど就けない“フリーター”のモラトリアム状態を脱するための要因は明らかになっていない。しかしながら、サークル活動や、インターンシップなど、自己を模索する手段が豊富にある大学生と、職を探したいけれど現状に甘んじて探していないフリーターでは、勇気を規定する要因も変わってくると考えられる。したがって、今後の研究ではさらに調査対象者の幅を広げることで、職についていない者の支援についても考える必要がある。また、今回は量的データによる検討を行った。今後は、これから成人の世界へ飛び込んでいく大学生の選択場面における勇気がどのような場面でどのような働きをしており、どのようなプロセスで獲得するのか、質的なデータによる具体的なレベルでの勇気を規定する要因の研究が望まれる。

付記

本論文は、2018年度北海道教育大学学校教育専攻・教育心理学分野において卒業論文として提出したものに加筆・修正を加えたものである。本論文の作成にあたり、ご指導いただきま

した、北星学園大学佐藤祐基先生、北海道教育大学益子洋人先生、調査にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 安東 友子 (2006). 主導性と評価懸念の関係——家庭環境の観点から—— 日本青年心理学会大会発表論文集, 14, 52.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and life cycle*. New York: International Universities Press. (エリクソン, E. H. 西平 直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 藤田 正 (2008). 大学生の完全主義傾向と先延ばし行動の関係について 教育実践創造センター研究紀要, 17, 125-128.
- 堀合 俊博 (2011). 青年期の選択場面における勇気尺度作成の試み——漸成発達理論の枠組みから—— 立教大学心理学研究, 53, 1-15.
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造——失敗観尺度の開発—— 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 熊野 道子 (2013). 生きがい形成モデルの測定尺度の作成——生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度—— 大阪大谷大学紀要, 39, 1-11.
- 光浦 睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響——認知的方略の違いに着目して—— 教育心理学研究, 58, 348-360.
- 中西 有希子・玉瀬 耕治 (2014). ストレス状況下におけるレジリエンスとハーディネスの役割 帝塚山大学心理学部紀要, 3, 31-41.
- Norem, J. (1989). Cognitive strategies as personality: Effectiveness, specificity flexibility, and change. D. M. Buss & N. Cantor (Eds.), *Personality psychology ; Recent trends and emerging directions* (pp. 45-60). New York : Springer-Verlag.
- 小此木 啓吾 (1978). モラトリアム時代の人間中公叢書
- 大野 久 (2010). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房
- 桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関連 心理学研究, 68, 179-186.
- 下山 晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で—— 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 下山 晴彦 (1996). スチューデントアパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.
- 外山 美樹 (2015). 認知的方略尺度の作成および信頼性・妥当性の検討——熟考の細分化を目指して—— 教育心理学研究, 63, 1-12.
- 吉田 朋子 (1987). 進路決定における意思決定過程の学習の効果 進路指導研究, 8, 1.